

失つてゐるが、幸に經卷の首尾ともに残つて居り、それによつて直ちにこれが漢譯「大方廣佛華嚴經入不思議解脫境界普賢行願品」のトルコ語譯であることが知り得られる。漢譯と對比すると、寫眞IからXは、四十華嚴卷三十三の首部に當り、縮藏天六の四十七枚表面本文首行の下部から、裏面七行までに及んでゐる。兩者を對照することによつて、これ等十一面の寫眞の順序を整へることが出來ると共に、各面は原との紙面のほぼ上半分を残してゐるのであつて、それに接する下部ほぼ半分が失はれてあること、また原本は各葉表裏兩面に書かれてあつたのを、寫眞では別々に寫したのであることも知り得られる。原本が兩面書きであつたに違ひないことは、寫眞に余のつけた奇・偶の數を順次合せて見れば、紙端の缺け目のよく一致することからも明らかであるのみならず、トルコ文で書いてある丁附けが、下に譯出するやうに、寫眞の一枚おきに記されてあることによつても疑ふ餘地はない。最後の一面即ち寫眞Xの始めの三行は、僅に數語の外は字畫が汚損して判讀し難いが、これらの數語から考へると、これが寫眞Xの面に直ちに續いた本文とは思へず、XとYとの間には、必ず何枚かの散佚があるに相違ない。その第四行目からは奥書で、譯述を命じた人や、譯者の名や、經名が記されてある。或は殘卷を寫眞するに當つて、その首部五枚（表裏十枚）と、卷尾の一枚とだけを撮影して、中間を省略したのであるかも知れない。

この經典の體裁は、每葉第六行から第八行に亙る中央に圓形を畫いて空白を残し、圓形の中央に綴糸を通した小孔を存してゐる。これは周知のやうに、貝葉經典の形式を傳へたもので、多くの類形殘簡に於て、普通に認められるところである。字體は嚴正ではあるが、然も必ずしも讀み易いのではなく、その書き癖によく通じないと、誤讀に陥り易い。その上、所々に寫眞の文字の消えたのがあつて、讀解し難いところも少くない。この字體は普通にウ